

第32回 第4章 近代国家の形成と国民文化の発展

日露戦争

執筆・講師
季武嘉也

学習のねらい

1904年、日本は国運を賭けて世界一の陸軍国ロシアと戦争を開始した。ロシアが勝つであろうと多くの国が思っているなかで、なぜ日本は戦争に踏み切ったのであろうか。日本は勝利するためにどのような準備を行い、実際の戦闘はどのようなものであったのだろうか。そして、日本が勝利したことで日本の国際的な立場はどのように変化したのであろうか。

ロシアの満州進出と日英同盟

1895年、日清戦争で日本が勝利したことによって東アジアの国際秩序は大きく変化し、日本ばかりでなくイギリス、フランス、ロシア、ドイツなどの列強も参加して中国分割競争が始まった。列強は自分たちの勢力範囲を設定し、鉄道や鉱山などの権益を獲得しようとした。そのようななかで1900年には中国国内で「扶清滅洋」を合言葉に、外国人排斥運動である義和団事件が起きた。この事件は日本軍を中心とした列強の連合軍によって鎮圧されたが、ロシアはこれをきっかけに中国東北部の満州に軍隊を派遣し、事件解決後も占領を続けた。これに対し、日本はロシアが満州のみならず、朝鮮半島にも影響力を伸ばそうとしているのではないかと危機感を持った。もし朝鮮半島がロシアの勢力下に入れば、ロシアはさらに南下して、日本の安全保障は危機にさらされるであろうと考えたのである。そして、1902年、アジア全域で同じくロシアの南下政策と衝突していたイギリスとの間で日英同盟を結び、将来の日露戦争に備えようとした。

日露戦争

日本はその後も満州から撤兵するようロシアと交渉を続けたが、その限界を感じた日本は、周な作戦準備の上で、ついに1904年2月にロシアに宣戦を布告した。日本がまず攻撃したのは旅順であった。三国干渉以後、ロシアが租借していた旅順には堅固な要塞が築かれ、軍港には旅順艦隊がいて、ロシア軍の極東の重要拠点となっていた。この攻略は1905年1月にやっと成功したが、そのために日本側も多大な犠牲を強いられることになった。その翌月には、ロシア軍の満州における拠点である奉天（現在の瀋陽）で、両軍合わせて60万人にも及ぶ兵士が対峙し、大規模な戦闘が始まった。この奉天会戦でも日本軍は勝利を収め、奉天を占

領したが、日本側の損耗も大きく、これ以上の戦闘続行は不可能であった。一方、ロシア側も革命勢力の動きなどで東アジアに戦力を割くことがあまりできない状態であった。

こうしたなかで、最終決戦となったのが日本の連合艦隊とロシア・バルチック艦隊による日本海海戦であった。ここでも遠くからやってきたバルチック艦隊の消耗は激しく、日本の勝利に終わった。日本はこの機会を逃さず、アメリカに仲裁を依頼して戦争を終結させた。

満州経営

アメリカのポーツマスで行われた講和会議では、賠償金こそ取れなかったが、韓国における日本の優越権、旅順・大連の租借権、だいれん ちゅうせけん 長春以南の鉄道、北緯 50 度以南の樺太（サハリン）の譲渡などが認められ、領土を大幅に広げた。このうち、韓国は 1910 年に併合し、南満州では 1906 年に南満州鉄道株式会社を創設して鉄道経営ばかりでなく、撫順炭鉱など沿線の開発をめざした。そしてロシアとは、両国の満州における権益を確認し合い、さらに内蒙古の勢力圏を決める日露協約を締結した。こうして、国家の独立を目標にスタートした近代日本は列強の仲間入りをすることに成功し、新たな段階に突入した。

しかし、その後の日本の道のりは、必ずしも順調とは言えなかった。日本のロシアに対する勝利は、多くのアジア民族を力づけるものであったが、一方で今度は東アジア諸地域や欧米列強から日本は、侵略的であると疑いの目で見られるようになったのである。特に、アメリカで日本への非難が高まった。